

一八八九年に横浜市が生まれた時、私たちの戸塚区は神奈川県鎌倉郡かまくらに属していました。村や町が何度か変わった後、一九三九年に横浜市になりました。

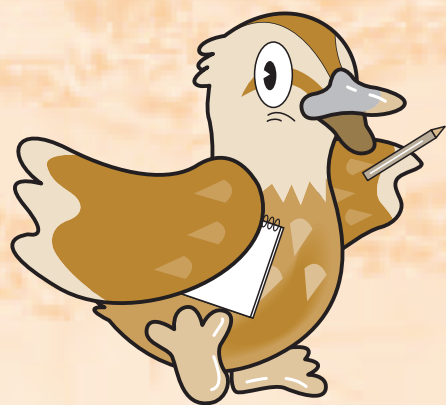
そのころの戸塚区は瀬谷区・泉区・栄区を含む広い地域でしたが、一九六九年に瀬谷区を、一九八六年に泉区・栄区を分区して現在の形になりました。





現在の戸塚区は、面積は三五・七平方キロメートルと横浜で一番広く、人口はおよそ二十五万九千人です。(二〇〇四年七月一日現在)

私たちの戸塚区は昔、どんな所だったのでしょうか。

# 戸塚 町と川の歴史

この町はいつからあるの？



-  誕生したときの横浜市
-  現在の横浜市
-  誕生したときの戸塚区
-  現在の戸塚区

### 太古、戸塚は海だった?!

一〇二万年前は氷河期と呼ばれ地球全体がとても寒い時期でした。海面は現在より百メートル以上低く、日本列島はアジア大陸と陸続きになっていました。東京湾も陸地になっていて、人びとはナウマンゾウなどの大型動物と一緒に生活していました。

そのころの人びとは、石で作った弓矢を使って狩をし、魚介類や木の実などを採って、食糧としていたようです。この頃のものが神奈川県内でも多数発見されていて、戸塚区でも発見されています。この時代は土器がなかったため、無土器時代または先土器時代と呼ばれています。

地球が暖かくなると、少しずつ氷河が溶けて海面が高くなります。最も海進\*が進んだ約六千年前には、柏尾川流域も低いところは海だったと推測されています。これを裏付けるように、戸塚駅の地下鉄工事を行ったとき、海にいる貝殻がたくさん出てきました。

この頃は土器につけられた縄目の模様から縄文時代(約一万年前から紀元前三世紀ころまで)と言われ、様々な土器や貝塚、堅穴式住居の跡が多数発見されています。

ところが縄文時代の

終わり頃になると、神

奈川県内では遺跡が極

端に少なくなりました。

その理由は定かではありませんが、一説には富士山の火山活動で大量の火山灰が降り動植物の息に大きな影響があつて、縄文人が生きていけなかったとも推測されています。



▲縄文時代の海岸線想定図  
【広報よこはま戸塚区版】平成7年4月号掲載

### 稲作の始まりは争いの始まり

約二千年前に、柏尾川流域も現在のような地形になりました。このころには水田で米が作られるようになり、人々は一ヶ所に留まって集落を作って住むようになりました。このころの集落の中には、収穫物などをめぐるムラ同士の争いからムラを守るため、周囲を溝で囲んだ「環濠集落」と呼ばれるものもありました。

この時代は弥生時代と呼ばれ、日本の歴史の中で初めて農耕が生活の中心になった時代です。そして金属製の道具が使われ始めた時代でもあります。今は残っていませんが、戸塚区でも環濠集落の跡が発見されています。(上柏尾町・上矢部町) また、ムラの外にはお墓が作られるようになりました。



▲ムラの中の暮らし模型 (横浜市歴史博物館蔵)

### 大きなお墓は力の象徴

三世紀後半〜七世紀には日本各地で大きなお墓(古墳)が作られるようになりました。この時代を古墳時代と呼んでいます。この墓に埋葬されたのは、各地の有力な首長とみられ、その形が共通していることから、有力な首長の間には、ある程度の連合関係があつたと考えられています。

戸塚区でもいくつかの古墳が発掘されています。古墳は開発などのため今では残っていませんが、横浜市歴史博物館で上矢部町富士山古墳から出土した人や馬などの埴輪を見ることができます。



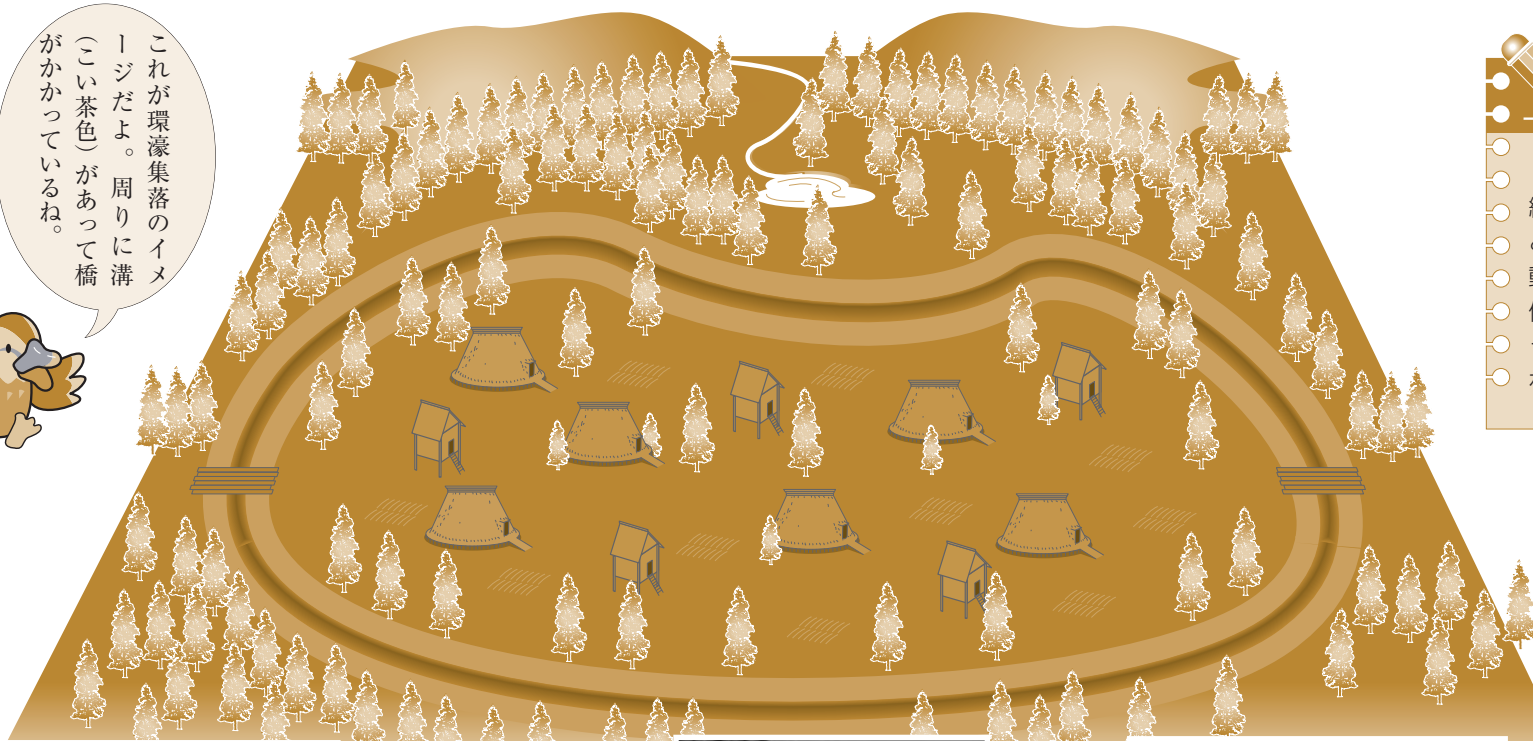
▲上矢部町富士山古墳より出土した埴輪。  
(横浜市歴史博物館蔵)

### かいしん かいたい 海進・海退

一口メモ

- 海面の高さが変動することによって、海岸線が陸地側に移動したり、逆に退いたりすることを海進・海退といいます。海面の高さの変動は、大陸の上にたまっている氷河の量が、気候の寒暖とともに変化したり、地盤が盛り上がり、沈んだりすることによって引き起こされると考えられています。(横浜歴史博物館資料)

これが環濠集落のイメージだよ。周りに溝(こい茶色)があつて橋がかかっているね。



▲環濠集落イメージ図



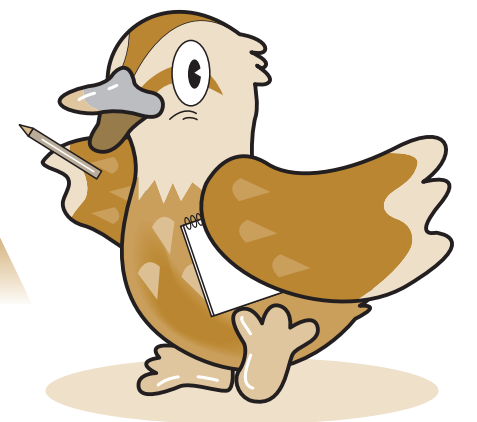
▲住居を建てる人びと (横浜市歴史博物館蔵)



▲コメの脱穀 (横浜市歴史博物館蔵)



▲方形周溝墓への埋葬 (横浜市歴史博物館蔵)



### 行ってみよう!

### 横浜市歴史博物館



「横浜に生きた人々の生活の歴史」をテーマに、2万年にわたる市域の歴史を展示しています。博物館の隣りは大塚・歳勝土遺跡や都筑民家園を中心とした遺跡公園になっています。

所在地 〒224-0003 横浜市都筑区中川中央1-18-1  
横浜市営地下鉄 センター北駅1番出口から徒歩5分  
☎ 045-912-7777 (代表)  
FAX 045-912-7780

- 開館時間 9:00~17:00(ただし入館は16:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(国民の祝日にあたるときはその翌日)、年末年始そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。
- 観覧料等は、歴史博物館までお問合せください。
- ホームページ <http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

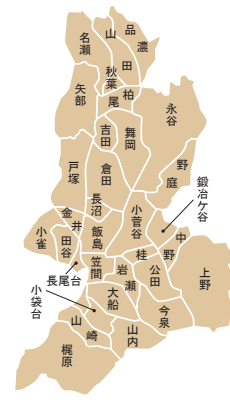
### 相模国鎌倉郡ってどこのこと?

人がまとまって住むようになると、支配する人、支配される人が出てきます。「律令」という法律で国を治めていた頃(八〜十二世紀)、戸塚区は相模国の鎌倉郡の一部でした。鎌倉に郡の役所(郡衙)があり、現在と同じように戸籍や租税台帳などが作られ、これらを基に地域が治められていました。

また、それぞれの国へ政府の命令(政令)を伝達するため、七つの官道\*が整備されました。後の伝馬制の基礎になった駅馬・伝馬のしくみはこのときから始まっています。

開墾した土地の私有を認める制度とともに律令制度がくずれ、権力を持つ人が自分の土地をどんどん増やしていきましました。そのような土地を荘園、そしてそこを支配する人を荘園領主としました。柏尾川流域には山内首藤氏と言う荘園領主が支配する山内荘が広がっていました。

その頃の古い文書に山内荘秋庭郷、や山内荘舞岡郷、山内荘吉田郷、秋庭郷内那瀬村・品濃村など、現在もある地名が出てくるのは興味深いことです。



▲山内荘荘域図  
出典「戸塚区の歴史上巻」

### 武士の登場と武士による支配

十一世紀の初め、藤原氏が「わが世の春」をうたっていた頃、地方では政治が乱れて、盗賊がはびこるようになり、荘園の領主は一族や郎等(使用人)に武芸を磨かせ武力を蓄えて自分で自分の土地を守るようになりました。

武士の登場です。源氏もこうして力をつけ、源頼朝が鎌倉に幕府を開きます。この時、山内首藤氏は源氏側につかなかつたので、領地を没収され追放されました。

鎌倉幕府が開かれると、源氏に味方した武士に領地(恩賞)が

与えられ、それまでと支配者が大きく変わりました。山内荘は農業生産力が高かったため、鎌倉幕府の北の要所として幕府が直接治める領地(直轄地)になりました。

また、鎌倉と各地を結ぶ道が発達し、最も主要な道は上の道・中の道・下の道と呼ばれました。戸塚区には上の道(鎌倉〜俣野〜瀬谷〜府中〜信濃追分)と中の道(鎌倉〜柏尾〜名瀬〜二俣川〜川和〜世田谷〜古河)が通っていました。「吾妻鏡\*」によると源頼朝が奥州征伐の時に通ったのは中の道だったようです。

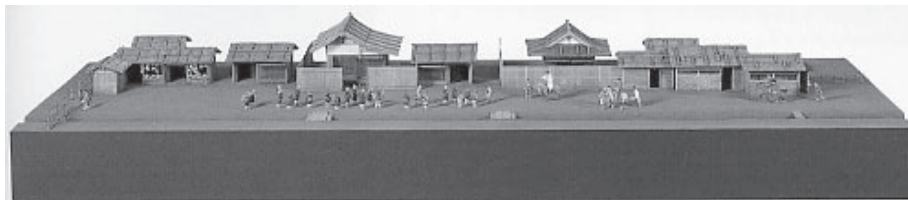
### 鎌倉から小田原そして江戸へ

室町幕府は鎌倉に関東管領という職を置いて関東を支配していました。山内荘は引き続き幕府の直轄地だったようです。戦国時代(十六世紀)に、南関東は小田原北条氏の支配下になりました。相模国の政治の中心が小田原に移り、商工業の中心も小田原に移りました。それとともに鎌倉はさびれ、農村や漁村のようになってしまいました。

このころの村人たちは、ふだんは農作業を行っていましたが、戦争が近づくと戦いに駆り出されたり、物資を運ぶ人足として働かされたりしました。

戦国時代の終わり、小田原北条氏は豊臣秀吉により滅ぼされ、関東の大部分は、このとき功績のあった徳川家康に与えられました。その後、江戸幕府に変わってからも江戸に拠点が置かれました。小田原北条氏が領地を支配するために行った検地や伝馬制度は、家康によっても踏襲されました。

江戸幕府は、戸塚など、江戸城に近いところを直轄地や旗本(関が原の戦い以前からの徳川家の家臣)領としました。戸塚一帯を治めることになったのは、代官頭彦坂元正で、泉区岡津町に役所(陣屋)を構え、各地に家来(手代)を置いて支配していたようです。ちなみに彦坂元正は、戸塚宿の本陣沢辺家から妻を迎えています。



▲鎌倉の町並復元模型 (横浜市歴史博物館蔵)

**豆知識**  
あずまかがみ  
吾妻鏡

一口メモ

「吾妻鏡」は鎌倉幕府が作った幕府の歴史を記録したもので、当時を知る重要な資料。時の政府が記録として作った歴史書には、古くは「日本書紀」「続日本記」などがあるよ。

**豆知識**  
武蔵と相模の国境

保土ヶ谷区と戸塚区の区境に境木地蔵尊があります。この境木という地名は、昔、武蔵国と相模国の境を示す杭があったことによると言われています。江戸を発った旅人が東海道で初めてこえる国境が境木でした。ここは尾根になっており、旅人は茶屋で名物の牡丹餅を食べながら一休みしたようです。

境木をこえると、そこは相模国。分区分前の戸塚区は相模国に属しており、その区境は武蔵と相模の国境でもありました。

境川(柏尾川の本流)も、上流が武蔵と相模の国境を流れていることからその名がついたと言われています。そして、下流ではこの二つの国の境と鶴見川・境川の分水嶺が一致しています。国を分けてしまうほど、川は昔のりびとにとって生活に影響を与えるものだったのです。

**一口メモ**  
七つの官道

- 東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の7つの道があり、その道に沿って政治を行う区域が分かれていました。こんなに昔から「東海道」という名前が使われてたなんて驚きだね。

▲延喜式による五畿七道 (「神奈川の東海道(上)」より作成)

### 関東諸国から鎌倉への道



『日本歴史展望第4巻 鎌倉武士の御恩と奉公』旺文社刊より作成

「いざ鎌倉」という言葉があったて、鎌倉の御家人の多くは、ふだんは自分の領地に住み争いや事件がおこると、鎌倉にかけつけることになっていったんだ。

▲鎌倉 上の道 (東保野町八坂大神付近)

### 東海道と戸塚宿成立の話

江戸に拠点を定めた徳川家康は、一六〇一年から江戸と全国各地を結ぶ主要な道路を整備します。特に重要なのが、東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道(五街道)でした。

戸塚は東海道の宿場町として栄え、その様子は歌川広重の浮世絵「東海道五十三次」などに描かれています。当時の一般的な旅では、江戸を発った旅人が最初に宿泊したのが戸塚宿でした。

実は、東海道ができた当初、戸塚は宿として指定されていませんでした。しかし、保土ヶ谷〜藤沢間はとても距離が長かったため、

実際には人や荷物を運んで稼ぐ者も、旅籠もあつたようです。戸塚では、正式に宿としての活動ができるよう幕府に「人馬継立願」を出し一六〇四年に認可され、戸塚宿が成立しました。この後東海道は参勤交代を契機に飛躍的に発達します。



▲「東海道五十三次之内戸塚」初代広重 保永堂版 (神奈川県立歴史博物館蔵)

### 黒船が来た！横浜の開港

江戸末期にペリーが浦賀沖に来港してから、幕府は鎖国を止めざるをえなくなりました。一八五八年日米通商修好条約が締結され、横浜が開港しました。このとき幕府の交換使節団の代表としてアメリカに行ったのが、品濃町付近を治めていた旗本新見正興です。

幕末には、将軍の上洛や長州征伐・官軍東征などで東海道の交通量は激増しました。東海道の維持にあつた村々の負担は重かつたようです。

また、開港後は横浜に外国人の居留地\*ができ、東海道は外国人の乗馬コースなどにもなつていたようので、外国人の往来が盛んにおこなわれていました。このころには戸塚でも外国人の姿が見られるようになります。当時の様子は明治初期に活躍した写真家ベアトの写真や浮世絵に残っています。



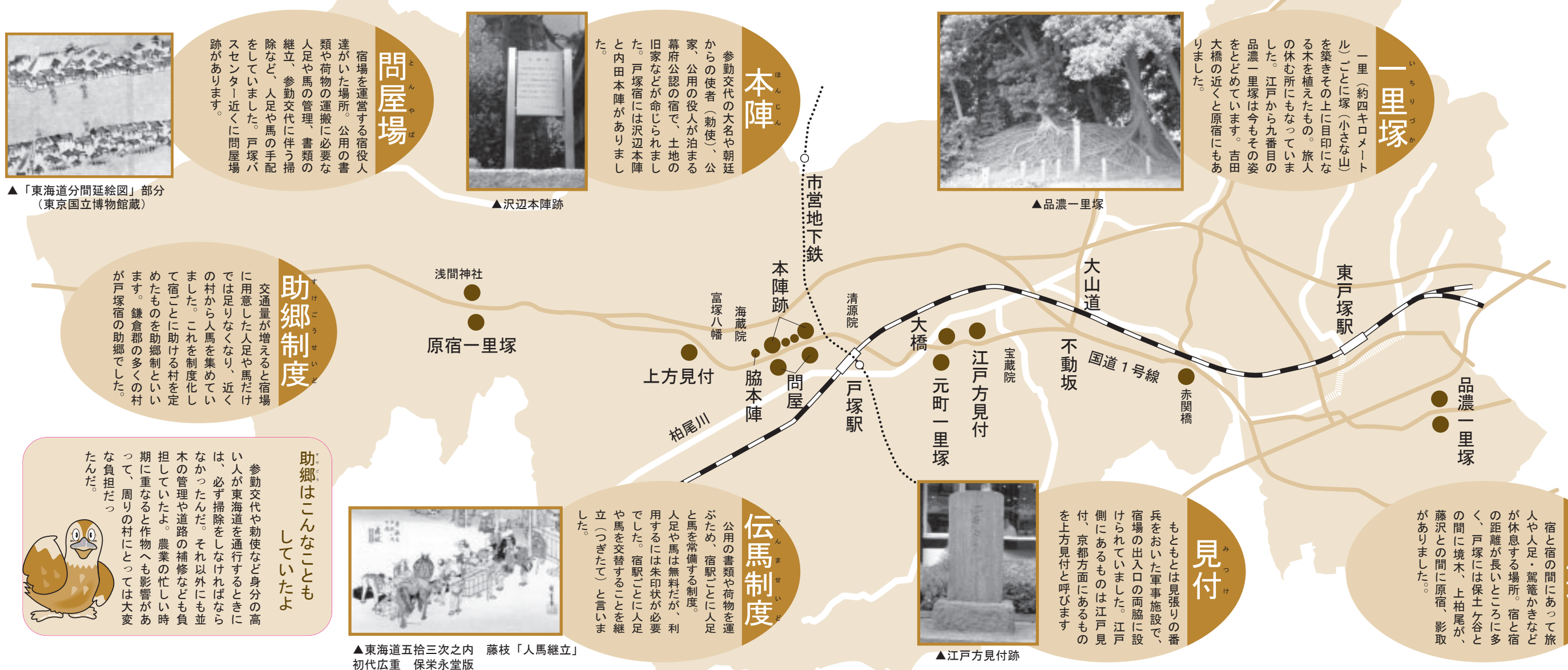
▲「東海道の一風景」F・ベアト撮影(横浜開港資料館蔵)

### きよりゆうち 居留地

外国人に土地を貸し、居住と営業を許していた場所。現在の中区山下町と山手町にあたる。その周囲10里(約40km)はパスポートを持たずに旅行できる地域になっていた。

### 歩いてみよう、

### 戸塚の東海道



### 立場

宿と宿の間にあつて旅人や人足・駕籠かきなどが休息する場所。宿と宿の距離が長いところに多く、戸塚には保土ヶ谷との間に境木、上柏尾が、藤沢との間に原宿、影取がありました。

### 見付

もともとは見張りの番兵をおいた軍事施設で、宿場の出入口の両脇に設けられていました。江戸側にあるものは江戸見付、京都方面にあるものを上方見付と呼びます。



▲江戸方見付跡

### 伝馬制度

公用の書類や荷物を運ぶため、宿駅ごとに人足と馬を常備する制度。人足や馬は無料だが、利用するには朱印状が必要でした。宿駅ごとに人足や馬を交替することを継立(つぎたて)と言いました。



▲東海道五拾三次之内 藤枝「人馬継立」初代広重 保永堂版

### 本陣

参勤交代の大名や朝廷からの使者(勅使)、公家、公用の役人が泊まる幕府公認の宿で、土地の旧家などが命じられました。戸塚宿には沢辺本陣と内田本陣がありました。



▲沢辺本陣跡

### 問屋場

宿場を運営する宿役人達がいた場所。公用の書類や荷物の運搬に必要な人足や馬の管理、書類の継立、参勤交代に伴う掃除など、人足や馬の手配をしていました。戸塚ハスセンター近くに問屋場跡があります。



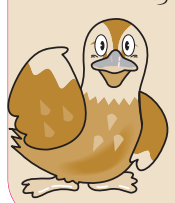
▲「東海道分間延絵図」部分(東京国立博物館蔵)

### 助郷制度

交通量が増えると宿場に用意した人足や馬だけでは足りなくなり、近くの村から人馬を集めていました。これを制度化して宿ごとに助ける村を定めたものを助郷制といいます。鎌倉郡の多くの村が戸塚宿の助郷でした。

### 助郷はこんなこともしていたよ

参勤交代や勅使など身分の高い人が東海道を通行するときは、必ず掃除をしなければならなかったんだ。それ以外にも木の管理や道路の補修なども負担していたよ。農業の忙しい時期に重なる作物へも影響があつて、周りの村にとつては大変な負担だったんだ。



### 明治時代は近代化のはじまり

明治時代になると戸籍・学校・租税などの制度が整えられていきます。それとともに、郵便、電信、鉄道、乗合馬車、新聞やキリスト教などの西洋文化がどんどん取り入れられ、このころを「文明開化」と呼んでいます。横浜が日本での発祥地になったものも多くあります。

一八七二年に新橋と横浜間に鉄道が開通するなど、世の中ではどんどん近代化が進みました。主なできごとは下の資料「戸塚くらしのあゆみ」を見てください。

### 大地がゆれた！関東大震災

一九二三年九月一日関東大震災が発生しました。神奈川県では死者・行方不明者あわせて約三万二千人、重・軽傷者は約二万人にのぼりました。当時の横浜市（ほぼ現在の神奈川・西・中・南・磯子区）の住宅の約九十五％が倒壊したり焼失したりしました。被害を大きくしたのは火災で、関内は一面焼け野原となりました。

幸い戸塚区では火災はほとんどありませんでしたが、戸塚・川上・大正などの地区で七割以上の家屋が倒れたり壊れたりしました。当時新築中だった戸塚町役場は一階がつぶれて二階がそのまま落ちてしまいました。

また、東海道の松が倒れたり、矢部トンネル（長後街道）の出入り口が埋まったりして交通もマヒしました。震災後崩れた矢部トンネルを切通しにする工事が行われ、その土砂は柏尾川の堤防の修理や周辺の埋め立てに使われました。

### 震災後から第二次世界大戦まで

第一次世界大戦（一九一四～一八年）後の好景気も長くは続かず、震災後の取り付け騒ぎをきっかけに金融恐慌が起こります。戸塚では、製糸業の衰退や米の値段が大きくなったたり下がったりした影響で、いろいろな作物（特に野菜）を作る農家が増えました。

世の中では軍の力が強くなり、日本は第二次世界大戦へと進んでいきました。戦争に必要な物資を生産する産業が発展するにつれて、工場は東海道路線に沿って南下し、戸塚が注目されるようになりました。一九三五年ごろには、戸塚にも日立製作所やプリジストンの前身となる工場が進出してきました。一九三九年には、大小あわせて二十以上の工場ができ、従業員の総数は一万人を超えていました。

東京や横浜の消費地に近いことや東海道路線・国道一号があり交通の便が良かったこと、柏尾川の水が工業用水として利用できたこと、まとまった土地や労働力が得やすかったことなどが理由のようです。こうして、横浜市の近郊農村だった戸塚は、どんどん都市化が進んでいきました。

### 大合併！横浜市戸塚区の誕生

一九三九年四月一日、戸塚町ほか七村（瀬谷、中川、川上、豊田、大正、本郷、中和田）は横浜市に編入され、戸塚区が生まれました。このとき横浜市は、その後の埋立地を除き現在の市域になりました。面積は東京市に次いで全国で第二位、人口は第六位でした。

当時の戸塚区の人口は三万人余り。その後、高度経済成長期（一九五五年～一九七三年）に、工場がどんどん建ち、郊外住宅地として市営住宅などが建てられ増加し続けました。一九六九年に瀬谷区を分区、一九八六年に泉区と栄区を分区し、現在の戸塚区になりました。

### 戸塚くらしのあゆみ

- 1871年(明治4) 戸塚郵便取扱所(郵便局)ができる
- 1872年(明治5) 戸塚出張ら卒屯所(警察署)ができる
- 1873年(明治6) 矢部学舎・富塚学舎(小学校)ができる
- 1878年(明治11) 鎌倉郡役所(戸塚区役所)ができる
- 1887年(明治20) 横浜-国府津間に東海道路線開通。戸塚駅開業
- 1889年(明治22) 市町村制が施行される。横須賀線開通
- 1908年(明治41) 戸塚郵便局で電話業務を開始
- 1909年(明治42) 戸塚町の一部で電灯がとまる
- 1914年(大正3) 長後街道が完成
- 1920年(大正9) 戸塚町-厚木間に乗合自動車ができる
- 1923年(大正12) 関東大震災がおこる
- 1928年(昭和3) 戸塚町営水道が給水を開始する
- 1931年(昭和6) 東海道(国道1号)が舗装される
- 1937年(昭和12) 戸塚駅に裏口(東口)ができる
- 1939年(昭和14) 横浜市に編入。乳幼児健診が始まる。
- 1945年(昭和20) 第二次世界大戦が終わる。深谷通信所が接続される
- 1947年(昭和22) 県知事・市長の初めての直接選挙が行われる。
- 1953年(昭和28) ワンマン道路完成。テレビ放送開始
- 1959年(昭和34) 横浜新道が開通。(初の有料道路)
- 1960年(昭和35) 公団矢部団地が完成。この後、続々と団地ができる。
- 1964年(昭和39) ドリームランド開園。上矢部第1次中小企業団地が完成
- 1969年(昭和44) 瀬谷区を分区。戸塚駅橋上駅が完成
- 1971年(昭和46) 戸塚バスセンターが完成
- 1972年(昭和47) 戸塚第二下水処理場が運転を開始
- 1980年(昭和55) 東戸塚駅が開業
- 1986年(昭和61) 泉区・栄区を分区
- 1987年(昭和62) 地下鉄が戸塚まで延伸。地下鉄戸塚駅開業

### 豆知識 とつか はじめて物語

近代水道や日刊新聞、洋式公園、ビールやテニスなど、日本での発祥地が横浜というものがたくさんあります。それらの中に戸塚が発祥地のものがありますが、次のうちどれかわかりますか？

- ①アイスクリーム ②パン ③ハム

答えは、この次を読めばわかります。

柏尾町の静かな住宅街に、重厚な赤レンガ倉庫があります。

明治の初めごろ、カーティスというイギリス人が日本人女性と結婚し、柏尾町でホテルを経営しながら、養豚場を設けてハムやベーコンを製造していたそうです。その後カーティスから製造法を学んだ益田直蔵や齊藤角次らが、この地でハムの製造を行いました。この倉庫は明治20年ごろに建てられ、ハムの貯蔵に使われていたそうです。ハム製造の始まりには諸説ありますが、ここが日本のハム発祥地であるハムが「鎌倉ハム」として全国に広まったことは間違いありません。



戸塚から大船にいたる県道に架かっていた高嶋橋。鉄筋コンクリート製の橋脚が折れてしまった。



東海道の名物の松並木も地震で多くが倒れた。戸塚町で倒れた松が国道をふさいでいる様子。



▲柏尾川の堤防の被害の様子。



じゃあ次に、都市化が進んでいった様子を見よう。

※出典「大正十二年九月一日大震災記念写真帖」神奈川県

れきし  
コラム



▲散歩コースとして区民に親しまれている「柏尾川プロナード」



◀昭和12年ごろの柏尾川（高嶋橋付近）の様子。せき止めた川でボート遊びをする人びと

## 柏尾川の桜並木

ながながと三万人の人影をまじえて霞む堤の桜（与謝野鉄幹）  
咲く花の空につづける幕打ちて正しく走る柏尾川かな（与謝野晶子）

これは昭和初期の柏尾川堤の桜を詠んだ歌です。この頃の柏尾川堤は、関東屈指の桜の名所として有名でした。せき止めた川には屋形船が浮かび、土手には屋台が並び、東京や横浜中心部からも大勢の花見客がやってきました。

桜並木の始まりは古く江戸時代末期に始まります。大雨で壊れた堤防を直した記念に植えられました。このときの桜は明治初期には絶えてしまったようですが、再度植樹されました。

この桜も、明治の終わりに行われた耕地整理のときに、いったん切られてしまいましたが、工事の完成を祝って千本の苗木が植樹されました。その桜が最盛期となったのが昭和初期です。このころは桜が土手の両側に植えられ、堤はまさに「桜のトンネル」になっていました。しかし、この桜も戦争によって、燃料や材料として次々に切り倒され、全滅してしまいました。

一九五三年、戸塚の商店会など町の有志が中心となり、ソメイヨシノ二千本を植えたのが今の桜並木です。その後、周辺の都市化が進むにつれ、洪水の被害が大きくなってきました。そこで一九七六年から洪水を防ぐための大規模な改修工事が行われることになりました。当初は、桜を切る予定でしたが、保存の声が区民から上がり、約二百本が残され、五百本余りを植えなおしました。

このように、柏尾川の桜は何度も切られては植えなおされてきました。最近では戦後に植えた桜の老齢化が進んできたため、今後は戸塚区役所を中心に計画的に植え替えなどを行っていきます。

## 田んぼは工場に、畑は住宅に

戦争が進行するにつれ、戦争に必要な物資を生産するため、京浜地区に土地を求めにくくなった工場が戸塚に移ってきました。辺り一面が田んぼだった戸塚は工場地帯へ急変します。中でも柏尾川沿いには、大工場が続々と建てられました。

そのころの戸塚町は「戸塚軽工業地帯」と呼ばれ、移り住む人も多く、土地の値段はどんどん上がっていききました。一九二一年に四四〇八人だった戸塚町の人口は、一九三八年には八三一二二人に増えています。

戸塚区が誕生した一九三九年ごろは、農業が戸塚区第一の産業で、全世帯の約六割を農家が占めていました。しかし、戦後の**農地解放**で自分の農地を得た農家は、政府の命令により自由な作付けはできませんでした。そのため、戦争から復旧するにつれ、規模の小さい農家は畑を売って農業をやめていきました。また、作物も稲作から換金性が高い野菜を中心とした都市近郊型の農業に変わっていききました。野菜も加工して出荷するなどの工夫をしていました。

## 農村から都市への変身

関東大震災からの復旧をきっかけに、各地で道路の整備がさかんになりました。一九二八年には名瀬道路の切通しが開通、一九三一年には東海道の舗装が行われました。経済の発展と道路整備により、自動車の利用も次第に増えてきました。その後、一九五三年には「ワンマン道路」が開通し、戸塚駅大踏切の渋滞が解消されました。ワンマンで有名だった吉田首相の命令で作られたこの道路は、

### のうちかいほう 農地解放

一口メモ

地主が所有する農地を国が買い上げ、土地を持たない農家に安く売り渡したことをいいます。これにより自分の農地を持つ農家が大幅に増えました。



▲現在の戸塚駅周辺 2000年 横浜市撮影



▲昔の戸塚駅周辺 1947年12月20日 米軍撮影（国土地理院蔵）

開発の進むこの地域での道路整備の象徴でした。一九五九年には横浜新道も開通しました。

戦争からの回復が進むにつれ、工業地帯は次第に内陸部へ拡大していきます。一九五六年以降、戸塚区内にも多くの工場が進出し、大工場が多いのが戸塚区の特徴でした。それとともに区内の商業は著しく伸び、一九五二年ころから駅周辺に商店街が作られ、十年間で店の数は二倍以上に増えました。一九六四年と六六年には上矢部町に中小企業団地ができます。工場の進出は働く人の需要を伴い人口も飛躍的に増えていきました。

昭和三十年代中ごろから、横浜では首都圏のベッドタウン\*化がすすみ、戸塚区でも四十年代には市営・県営住宅などの大規模な団地の建設ラッシュとなりました。その後も人口は増加し続け、一九八五年には、日本で最も人口の多い行政区\*となります。人口が増加する一方で、農地の面積は急速に減少していきました。そして都市化が進むにつれ、区内でも水害や廃棄物の処理、川の汚れといった様々な問題が生じてきました。

**一口メモ** **ベッドタウン**

東京などの周辺で、昼間は都心部に働きに行き、夜は家に寝る生活をするような住宅地域のことを言うよ。寝床 (bed) と町 (Town) をくっつけてできた言葉。英語じゃないよ！

**水浸しになった町**

みなさんは、街が水浸しになるのを経験したことがないでしょう。今から二十数年前までは、毎年のように柏尾川が氾濫し、周辺は水浸しになりました。

柏尾川は昔から暴れ川として有名で、長雨になるとよく洪水を起こしました。柏尾川は、上流と河口の高低差が小さいため、流れがとても緩やかです。そのため、昔は流れてきた土砂がたまる、川床が周りの土地と同じような高さになってしまい、すぐにあふれた

そうです。

柏尾川の水害が大きな問題になったのは、一九五八年の狩野川台風の時でした。その後も、たびたび大雨による水害が生じ、上倉田団地や矢部団地では床上浸水などの被害を被っています。

**水害が増えた理由**

一九七三年から五年連続で大水害が起こりました。それは、急激な都市化で地域全体の保水・遊水能力\*が落ちたことが原因といわれています。

都市化が進むにつれ、山や田・畑だったところに建物が建ち、川の近くまで人が住むようになりました。地面がアスファルトでおおわれ、降った雨は地中にしみ込むことなく、一気に川に流れるようになりまし。

わずかな雨でも、方々から一気に水が川に流れ込み、下流に向かって合流を繰り返します。下流ほど多くの水が集まるため、洪水の危険が高くなるのです。柏尾川は、たくさんの支流（舞岡川など）から流れ込んだ水で、たびたび洪水を繰り返したのです。

また、川沿いの田や畑が次々に住宅に変わったため、被害が農作物から住宅や人へと変わっていったのです。

**水害をおこさない川へ**

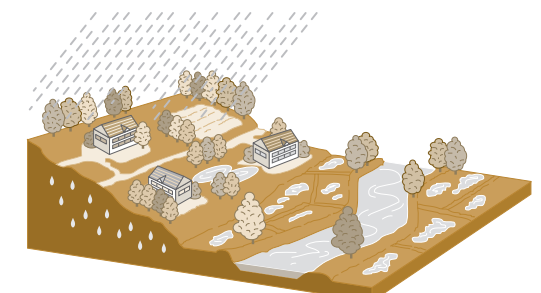
水害を解決するため、柏尾川では昔から何度も堤防などを改修（悪いところを直すこと）してきました。記録が残っているものでは、古くは江戸時代、そして明治末期には大改修が行われています。

**一口メモ** **保水・遊水能力**

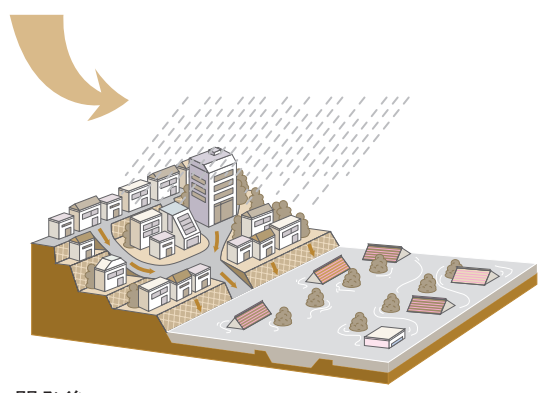
降った雨を地中に浸透させたり、一時的に貯めたりして水を貯える力のこと。昔は降った雨は森林や水田、池沼などにたまり、すぐに流れ出ませんでした。

**柏尾川の水害と改修の歴史**（戸塚区の歴史・戸塚区史より）

年 月	被害の状況、その他
1707年	富士山噴火。降灰により水行が悪化連年のように洪水をおこす
1836年	3月から8月まで雨が降り続き大凶作となる
1844年	4月と7月に堤防が決壊
1848年7月	大雨により100mにわたり堤防が壊れる水田10町歩が冠水
1859年7月	大洪水発生。材木・稲束などが押し流され往来が不通に
1875年8月	大雨により氾濫 1884年9月、1889年9月、1897年9月、1907年9月にも氾濫
1906年	耕地整理組合結成。併せて河川改修が行われる
1921年10月	大雨により氾濫。柏尾川一帯の低地は丸3日間水が引かず
1938年6月	大洪水発生。線路が水浸しとなる
1940年8月	柏尾川改修工事起式（戦時中のため抜本的な工事にいたらず）
1942年7月	豪雨後の台風。浸水家屋300戸以上 保土ヶ谷～戸塚間トンネルの入口崩壊
1958年9月	狩野川台風。床上浸水379戸、がけ崩れ18カ所
1961年6月	集中豪雨。死者2名。半壊家屋17戸 床上浸水500戸以上
1966年6月	台風4号。床上浸水1700戸 横浜市に災害救助法発動
1070年7月	集中豪雨。床上浸水190戸
1973年11月	集中豪雨。床上浸水1600戸（11月の横浜気象台観測史上最大の雨量）
1974年7月	床上浸水1000戸以上、がけ崩れ22カ所、橋の流出2カ所、田畑の冠水30ha
1975年10月	上倉田、矢部団地の一部冠水
1976年9月	台風17号。250戸が床上浸水
1976年2月	激甚災害対策特別緊急整備事業に指定され、改修始まる
1979年4月	境川（水系）が総合治水対策特定河川事業に指定される平成元年でほぼ事業は終了



**開発前**  
降った雨は、森や田畑の地中にしみこみ、地下水などになって徐々に流れていきます。川の周りは農地などで、農作物に被害が出ました。



**開発後**  
アスファルトなどで覆われていて、降った雨は地中にしみ込めないため、表面を伝い、一気に川に流れていきます。川の周りは住宅で、人や住宅に被害が出ます。

**一口メモ** **ぎょうせい行政区**

横浜市などの政令指定都市には、市の仕事の一部を行う単位として「行政区」があり、戸塚区もその一つです。一方、東京都の特別区は市と同じ役目をしています

会社でいえば本社と支店の関係に似てるよ。特別区は独立した会社だね。



▲流れる水であふれそうな境川の様子



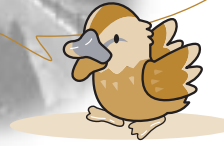
▲洪水のためボートを使って移動する人びと

上倉田団地や矢部団地では、昔、洪水に備えて一階にボートが吊るしてあったよ。水があふれた時、区役所の人はボートを使って通勤したんだって。

一九五八年の狩野川台風の被害があまりにも大きかったため、国は阿久和川・平戸永谷川などの改修を決め、一九七四年から改修が始まりました。また、大きな面積を開発するときには必ず遊水池\*を設置することになりました。

一九七六年には、柏尾川が緊急に改修されることになり、川幅を広げ、川を掘り下げ、堤防を強くする工事を行いました。一九七九年からは降った雨が一気に川に流れ込まないような設備や、集まった川の水を調整するため「金井遊水池\*」がつけられました。この工事が行われてからは、大きな被害は起きていません。

**「ゆうすいち」には遊水池と遊水池の2種類があるって知ってる？**  
 この違いはなんだろう？  
 答えは36ページを見てね。



### 汚れてしまった川

洪水とともに都市化が川に与えた影響が、川の汚染です。下水道が整備されるまでは、家庭や事業で使った水は直接川に流れていました。中には汚い水を流していた工場もあったようです。一九五五年ころから、家や工場がどんどん増えていくにつれ、たくさん汚れた水が川に流されました。このため、自然の浄化（水をきれいにする力）では追いつかなくなり、川はどんどん汚れていきました。そして人は川から顔を背けるようになり、ゴミなどを投げ捨てるようになったのです。きれいな川に戻すため、横浜市では一九五七年から下水道の整備を始めます。一九六九年からは戸塚でも下水道の整備が始まり、一九七二年に栄第二下水処理場が運転を開始しました（横浜市で四番目）。現在では、ほとんどの地域で整備されています。（横浜市の整備率九九・六％ 平成十四年度末現在）



**とてもきれいだった昔の柏尾川**  
 昭和の初めころまでの柏尾川を知っている人たちは必ず「昔の柏尾川はとてもきれいだった」と言います。柏尾川で泳いで遊んだり、ウナギやドジョウ・シジミなどを採ったりしていたそうです。採った物をおこずかいにしたりもしたようですよ。

### 川とともに暮らす

ときどき牙をむきながらも、川は昔から人の生活になくしてはならないものでした。魚などの食べ物を与えてくれる場所から、農業や工業を支える水を供給する場、子どもたちの遊びの場、そして都会に残された緑や生き物を育む憩いの場へと、その役割の中心は時とともに変化しています。しかし、川が私たちの生活を支えていることに変わりありません。私たちはもっと川を知り、川とともに暮らしていくことが必要ではないでしょうか。

次は、川の成り立ちやその様々な役割を一緒に見ていこう。



#### 豆知識

### 戸塚ポンプ場のこと知っていますか？

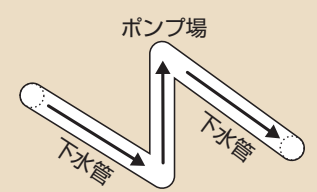


**栄第二下水処理場**  
 戸塚区内の下水は、栄第二下水処理場と西部下水処理場で処理をしています。大半は栄第二下水処理場で行っています。栄第二下水処理場は、横浜市で四番目にできた処理場です。処理場の中にはポンプ施設が3ヶ所あり、下水管を流れてきた下水を汲み上げて処理施設に送っています。処理場を見学することもできます。事前に処理場までお問い合わせください。TEL861-3011 FAX863-0664

柏尾川沿いに戸塚地区センターと一体となった写真のような施設があります。この施設、何だか知っていますか？  
 ここは戸塚ポンプ場とあって、大雨の時に、戸塚・吉田・矢部・柏尾町のまちが水びたしになるのを防ぐために、雨水を川に流す役割をしています。



もうひとつの役割は、阿久和川・名瀬川流域の汚水を栄第二下水処理場に送るために汚水を汲み上げる仕事です。下水道は高低差を利用して汚水を流しているため、遠いところから流れてくると、下水処理場の近くでは地下のとても深いところを流れることになります。そこでポンプ場では、いったん高いところまで汚水を汲み上げてから流しています。ここの機械の運転や監視は、約2kmはなれた栄第二下水



処理場から行っています。戸塚ポンプ場の沈砂池の上部は、図書館・地区センター・公会堂になっており、横浜市の下水道施設では初めての複合施設としてつくられました。

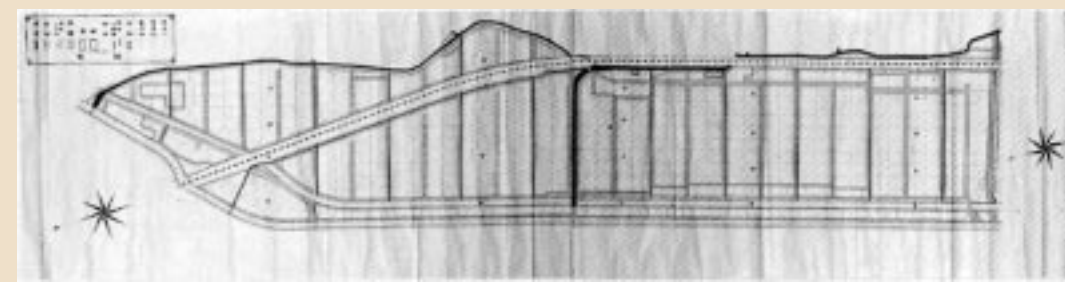


## しきり 明治の大改修

雨が続くとすぐに氾濫する曲がりくねった柏尾川の流れは、作物の収穫に大きく影響したので、付近の村々では水に関する争いが絶えませんでした。明治三十四年、明治天皇が横須賀に行かれる際に電車の窓から洪水直後の戸塚の惨状を見て側近に嘆かれたことをきっかけに、河川改修と耕地整理が行われることになりました。川が急に曲ったところの川幅を広げて真っすぐにし、堤防を築き、川底を掘り下げました。また、水田を基盤の目のように整え、水路を作りました。当時の工事は鍬やシャベルを使い、トロツコで土砂を運ぶのですから大変な労力が必要としました。この工事をたたえる碑が、朝日橋の近くに建てられています。



▲朝日橋近くにある明治期の改修を顕彰する石碑（左）と昭和期の改修記念碑（右）



明治時代末に行われた柏尾川耕地整理計画図





▲桜橋



▲戸塚駅ホーム



▲駒立橋



▲朝日橋



▲吉倉橋



▲大橋



▲高嶋橋



▲五太夫橋



▲赤関橋（改修中）



## 柏尾川の橋あれこれ

戸塚区の中央を東海道に沿って流れる柏尾川には、たくさんの橋がかかっています。そんな橋たちのエピソードを少し・・・  
柏尾川の始点から見える戸塚跨線橋。柏尾川と線路をまたぎ、ワンマン道路を不動坂へと導きます。

東海道といえば誰もが思い描く「東海道五十三次」の浮世絵。この「戸塚」に描かれているのが吉田大橋です。昔は幅三間ほどの木橋でしたが、今では日に千本以上のバスが通る堅固な橋です。その下流にある小さな橋は駒立橋。現在、工場がある場所は、昭和初期には競馬場でした。出走馬がこの橋付近で支度を整えたため、こう呼ばれるようになったとか。（馬のことを駒といいます）

戸塚駅東口のメインストリート、吉倉橋。かつては吉田と倉田を結ぶ村道にかかる小さな木橋でした。今では東の玄関口にふさわしい堂々とした橋です。

柏尾川に架かるものといえば戸塚駅のホームも。川の上にホームがある駅はとも珍しく、他にないのでは・・・

駅から下流に向かって朝日橋、桜橋、高嶋橋と続きます。桜橋は花見の名所。橋から桜並木のパノラマが楽しめます。高嶋橋は「東海道分間延絵図」などにも描かれている古い橋です。さらに下って柏尾川大橋。これからは交通の幹線（環状三号線）として活躍することでしょう。

このほかに平戸永谷川の赤関橋、舞岡川の五太夫橋も古くからある橋です。小田原北条氏の重臣だった石巻五太夫康敬が、江戸に入る徳川家康にこの付近で会見して赦されたという言い伝えが五太夫橋の名の由来と言われています。

古くからまちや人をつないできた橋たち。何気なくわたっている橋の歩み、ご存知でしたか。